

ローゼンバーグ自尊感情尺度の 2 側面と自己愛人格傾向 — クラスター分析による検討 —

○福留広大 (広島大学)

森永康子 (広島大学)

キーワード：自尊感情、自己愛

本稿は、ローゼンバーグ自尊感情尺度に対して、逆転項目群因子 (Negative Self-Esteem; NSE) と順項目群因子 (Positive Self-Esteem; PSE) を仮定した場合に、それら 2 因子と自己愛の関係性において如何なる個人の存在を想定できるか探求するものである。福留他 (2015) では、クラスター分析 ($N = 177$) を行い、 $PSE < NSE$ の関係性が成立したクラスター群の (誇大性) 自己愛は低く、これを健全な自己評価群とした。しかし、サンプル数が少ない上、自己愛については誇大性の側面と脆弱性の側面が存在している。そこで、新たにサンプル数と自己愛を測定する尺度の種類を増やして分析を行う。

方 法

2014 年～2018 年にかけて収集した次の各データセットに対してクラスター分析 (k-means++法, R 3.4.3 を用いて LICORS 0.2.0 パッケージの kmeanspp 関数を使用) を行った。全てのデータセットに自尊感情尺度 (清水, 2001; 山本他, 1982) が含まれる。データ 1: 以下の全てのデータセットについて自尊感情尺度の部分を併合したもの ($N = 5337$)。データ 2: 中学生 ($N = 430$)。データ 3: 大学生 ($N = 177$)。データ 4: ネット調査による日本全国の 18 歳～25 歳 ($N = 400$) 自己愛人格傾向尺度 NPI-35 (小西他, 2006) を 5 件法で使用。データ 5: ネット調査 15 歳～69 歳 ($N = 2830$) DTDD-J (田村他, 2015) よりナルシズム因子項目。データ 6: ネット調査 18 歳～25 歳 ($N = 600$) 自己愛的脆弱性尺度 (上地・宮下, 2009)。データ 7:

ネット調査 15 歳～69 歳 ($N = 900$) 評価過敏性-誇大性自己愛尺度 (中山・中谷, 2006)。

結果と考察

計 5 回のクラスター分析の結果を Fig.1 に示した。なお、解釈可能性から、全て 5 クラスターを指定して分析を行い、重要と思われるクラスターを抜粋した。データ 1 では自尊感情について、P 中 N 中群, P 高 N 高群, N 高 P 低 (N 優勢) 群, P 高 N 低 (P 優勢) 群, P 低 N 低群に分かれた。以下、P 優勢群と N 優勢群を優先して結果を抜粋する。データ 4 では、N 優勢群では自己愛が低いのに対して、P 優勢群では自己愛が最も高かった。データ 5 では、N 優勢群でナルシズムは低く、P 優勢群でナルシズムは高かった。データ 6 では、N 優勢群で自己愛的脆弱性は低く、P 優勢群で自己愛的脆弱性が高かった。データ 7 では、N 優勢群で誇大性・評価過敏性ともに低く、P 優勢群で誇大性・評価過敏性ともに高かった。これらの結果は、福留他 (2015) を支持する。また、程度の差はあるものの、自尊感情の 2 側面が不健全な意味でアンバランス (P 優勢群) な個人が数%から 20%ほど存在する可能性がある。高自尊感情であることが自己愛を意味するのではなく、自尊感情の 2 側面の関係性によって自己愛を推測できる可能性がある。

付 記

JSPS 科研費 (研究課題 JP16J03013)

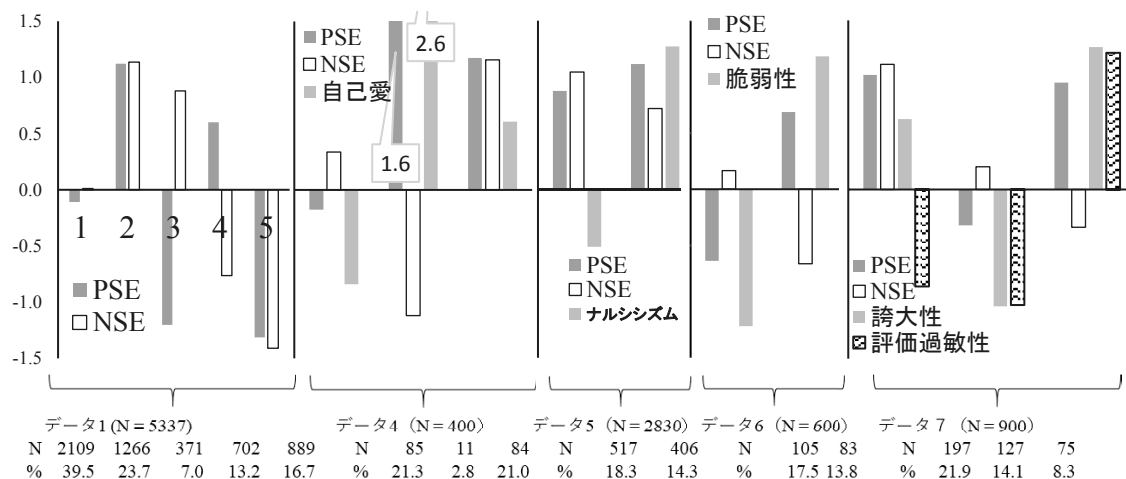


Figure 1 自尊感情と自己愛のクラスター分析 (縦軸: Z 得点, 全てクラスター数 5 で分析し一部抜粋)